



スブド ハンドブック

～心の時代から魂の時代へ～

序

全ての人がおのおの自分自身で、神への正しい道を発見するでしょう、さらに、ある人にとって正しい道でも、他の人にとっては全く間違った道かもしれません。ですから、神への道を見出したいと望むなら、あなた自身を見つけなければなりません。そしてあなた自身の内的な自我を発展させなさい。他の人に従ったり、真似をしたりしてはいけません。

ムハマッド・スブー・スモハデイウイジヨヨ



パパ・ムHAMMAD・スプー・スモハディウィジヨヨ

スブド ハンドブック

～心の時代から魂の時代へ～

はじめに

スブドは二十世紀の新しい啓示として、第二次大戦後の世界に伝えられました。

啓示というのは、人類の精神的発展を助けるために、神から与えられる新しい知識や可能性のことです。しかし社会に大きな影響を及ぼすような啓示は、すでに長く途絶えているので、現在では、神の存在も、啓示というものが実際にあるのかどうかも疑われています。

スブドは啓示によつて開かれた新しい可能性を人々に伝えるにあたつて、宣伝や勧誘はしないという態度を貫いてきました。真剣に求める人には、宗教、文化、人種の違いにかかわらず、誰にでも扉が開かれています。その価値をみずから主張することなく、人々が、スブドによつて生み出される事実と、自分自身で体験したことに基づいて判断するのに委ねてきました。しかし、このような態度にも関わらず、一九五七年にイギリスで初めて海外に伝えられてから、スブドは短時日で全世界の多くの国々に伝えられました。

スブドは本質的に言葉によつては説明できないところがあります。また歴史的にみてもスブドの前例といえるものは存在せず、過去にあつたもの、今ある類似のものとは比べて、類推して判断することもできません。スブドは体験によつてしか理解できません。その意味で、以下の説明も、スブドそれ自体の説明というよりは、スブドに関する説明であり、スブドによつて起こったこと、経験し得ることについての説明にすぎません。

目次

① スブドとこれまでの時代	1
② ババ・ムハマッド・スブー	8
③ スシラ・ブディ・ダルマ	13
④ 神の力との接触	16
⑤ スブドと宗教	21
⑥ スブドと人類の調和	25
⑦ 言葉を超えた体験	27
⑧ 浄化ということ	33
⑨ スブドの果実	37
⑩ スブドと実生活	40
⑪ スブドの発展	44

[illegible]

①スブドとこれまでの時代

スブドはバパ・ムハマッド・スブー・スモハディウィジョヨ (Bapak Muhammad Subuh Sumohadiwidjojo) が受けた啓示に基づいて、一九四六年にインドネシアにおいて設立されました。

この啓示はバパ・ムハマッド・スブーにまず与えられ、後にスブドのラティハン（正式にはラティハン・クジワアン）として人々に伝えられました。

ラティハンという言葉はインドネシア語で修練または訓練、クジワアンはスピリチュアル（霊的）な、という意味です。しかし一般に使われているような意味での修練でも訓練でもありません。宗教や瞑想法でもありません。

スブドのラティハンとは、神の力との直接的な接触を確立して、その力の流入を受け、その力の働きの結果生じる作用を受け入れていくことです。

そのため適切な訳語がないので、便宜上、ラティハンというインドネシア語をそのまま使っています。

それがラティハン（訓練）と呼ばれているのは、こうして神の力の流入を受けると、自分のなかで自動的に変化が起こってくるからです。その変化の過程が訓練です。ですから訓練といつても、自分の意志でおこなう訓練ではなく、神の力によって「訓練させられる」という意味です。

人生の羅針盤

ところで私たち人間が、宇宙の根源である神から直接、神の力や導きを受けることができるかどうかは、人類の歴史が始まった時以来の問題です。宗教と呼ばれるものは、多かれ少なかれ、この問題とかわり合っています。

宗教が、人類の生活に計り知れないほどの影響を与えてきたことは誰でも知っていますが、現在では、宗教の意義に深刻な疑念が投げかけられています。科学の発達によって、人間に宗教が必要だった時代は終わったとして、宗教に無関心な人たちが増えています。一方、宗教が形骸化して本来の力を失ったために、モラルが崩壊し、人々は人生の目的を見失ったのだという意見もあります。

現在の世界は、羅針盤を失った船のように、行く手が分からなくなっていることは確かです。物質文化の急速な発達によって生活が便利になり、通信手段、交通手段の進歩で、世界

が狭くなつて一体化した反面、資源の枯渇や地球温暖化のような世界規模の脅威に直面しています。生活はめまぐるしく変化して、心の安定が失われています。貧困や格差の問題は一向に解決せず、無秩序と暴力が国際社会に広がっています。今では世界のどの地域で起きたことも、直ちに世界中に影響を及ぼします。

人々は、表面上は何事もないかのように生活していますが、心の底では時代の影響を受けて、深く傷ついています。明日世界がどうなるのか誰も言えないような状況のなかで、宗教を失い、科学がすべての問題を解決するという希望も疑わしくなつて、人々は何も信じられなくなっています。人生を方向づける確かな拠りどころを失つて、精神生活の基盤そのものが揺らいでいるからです。

宗教と預言者

古代において、社会が変動期にあるとき、預言者といわれる人たちが現れて、神から啓示を受け、人々の向かうべき道を示しました。彼らは神から選ばれて、人類と神との結びつきを回復させる仲介者（なかだち）となりました。

しかしこのような、特別に選ばれた人たちは別にして、普通の人たちも直接神から力と導きを受けることができるかとなると、きわめて困難であり、血のにじむような精進を重ねて



預言者モーゼの活躍の舞台となったシナイ山

たのです。

神の力との接触

しかし神を信じる人たちにとって、もし神と直接的な結びつきを持つことができたらい

も、目的に達することができると保証はないと考えられてきました。

多くの宗教には、古くから僧俗の区別があります。本気で神に近づこうと思うのであれば、世俗の生活は放棄し、専心神に仕えなければならないという考えからです。古代には、その区別が社会的身分として固定されていたことも多く、エジプトの神官、インドのバラモン僧が有名です。インドではそれが制度化され、今もカーストとして残っています。

このように専心神に仕える人が、僧、神官、司祭、牧師などの聖職者です。一般大衆は、その人たちに教えてもらって、初めて神とつながることができると考えられ

うのは、いつの時代にも否定しきれない願望でした。そのため人類の歴史を通じて、神に近づき、神との直接のつながりを得る道を求めて、生涯を捧げた人たちが数多くいました。そしてひと握りほどの人々は、実際に目的を達して、神の力との合一という至福の境地に到達できたと言われています。聖者とか大神秘家とか呼ばれる人たちです。そして確かにそのような人々が、衰弱し形骸化しかけた宗教を再生させてきたのです。

しかしそのような人たちも、やはり特別な人たちでした。預言者でこそありませんでしたが、例外的に恵まれた素質を持った人が、長く厳しい苦行と瞑想の果てにやっと到達できた状態で、一般大衆が望めるような状態ではありませんでした。

彼らは神によつて愛された人たちであり、神によつて愛されるのでなければ、そのような高い目標に達することはできないと思われたのです。

これらはキリスト教などの一神教の例ですが、実は多神教にもこれと似た状況があります。神道は多神教で八百万（やおよらず）の神々が存在しますが、人間が高位の神々と直接的な接触をもつことはできないとされ、最高神である天御中主尊は、人間とは一切係わり合いを持たないとされています。人間がつながりを持てるのは、もっと位の低い神や守護神です。

仏教は創造主としての神を認めないので無神論だとされますが、最終目標である涅槃（ねはん）に達するのは、きわめて困難であると考えられている点では同じです。

このため、時代が下がるにつれて、厳しい修行には不向きな一般大衆のために、在家の道とか、大衆宗教が生まれました。しかし、最高の目標を志す人々にとつては、世俗を離れて専心修行に打ち込むのが本筋とされたことに変わりはありません。世俗の生活を送りながら修行を続けることには、また違った意味での価値がありますが、求道一筋の人々と比べるとやはり分が悪いと思われたのです。

そして今

こうして人々の関心は、実現不可能な宗教的な理想を追い求めるよりも、身近なこの世の利益、すなわち現世利益の追究に次第に移っていきました。凡人の幸・不幸は世俗の生活のなかにあります。人々が望んでいるのは、楽に生活費を稼ぎ、健康で長生きすることです。そのため宗教に対しても、来世での約束だけでは物足りず、この世の利益を求めました。もしそれがはかばかしく得られなければ、神への信頼を失っていくのも、ある意味では自然の成り行きといえるでしょう。

科学の進歩がそれに拍車をかけました。宗教よりもっと確実にこの世の生活を変えてくれる日進月歩の科学に、人々の期待が集まりました。こうして人々は、神に近づくのに必要とされた生き方とは逆の方向に向かい始めました。神を想うことが少なくなり、ついには神

を疑うようになりました。神も神の力も、見ることも感じることもできない以上、神とは人間の頭がつくりだした観念に過ぎないのではないかというわけです。

現代はこういう時代です。そして神を失うと共に、他人との心のつながりも失った時代です。人々は孤独になり、自分の欲望と目の前の利益のほかには、確実と思えるものがなくなってしまうのです。

今世界は急速に一つになりつつあります。遠い国で起こったことが、思いもかけぬ大きな影響を世界中に及ぼします。その結果、混乱はますます多くなり、解決はますます難しくなっています。問題解決の切り札となるはずだった科学は、その使い方によつては、逆に人類を破滅に落とし入れかねないことが明らかですが、しかしそれをコントロールするに足る英知を人類はまだ持っていないのです。

スブドが現れたのはこのような時代です。こういう重い時代背景のなかで現れたのです。

② ババ・ムハマッド・スブー

ババ・ムハマッド・スブー（以下単にババと書きます）はジャワの貴族の出で、一九〇一年六月二二日に生まれました。「ババ」とはインドネシア語で父や年長者に敬意を表す一般的な言葉ですが、スブドの会員の間ではババと呼称されています。

彼は初めスカルノと名付けられましたが、体が弱く一時は死ぬのではないかと思われました。そのとき一人の乞食のような托鉢僧が門口に現れて、その事情を聞き、名前をムハマッド・スブーと変えるようにと告げて姿を消したと言います。名前を変えると子供は健康になりました。スブーというのは「夜明け」とか「黎明」という意味です。

彼はイスラム教徒として生まれましたが、子供の時から不思議な能力を示しました。また友達を真似て、ちよつとした子供らしい嘘をつこうとしても、舌がどうしても動かず、言葉にならなかったと言います。



パパ・ムハammad・スプー

一六歳位るとき、彼は「三二歳で死ぬだろう」という内からの声を聞きました。それまでの経験で、このような指示が間違いないことを知っていたので、三二歳で死ぬのなら学業に励んでも意味がないと考え、東部ジャワで聖者の名が高かったスーフイ（イスラムの神秘主義）の導師に弟子入りをしようと思いました。しかしその導師は、

少年を弟子として教えることを拒み、この子は将来神によつて直接導かれるだろうと言つて、会合に出て坐っていることだけを許しました。

一九二五年から三三年の間、二四歳から三二歳の間に、彼のその後の使命に関係する一連の出来事が起こりました。

一九二五年のある新月の夜、彼が戸外に出て散歩していると、あたりが真昼のように明るくなり、頭上高く、輝く光の球が現れるのを見ました。その光の球は頭を貫いて彼の中に入り、全身が内部から照らされて透きとおり、激しく震動しました。これは連れ立っていた友人その他の人々も目撃するところとなり、翌朝町の人々や、町から遠く離れたところにいた

人までが話を聞きに来ました。（この出来事の証人となった友人は、後に最初のスブド会員の一人になりましたがその後亡くなりました。）その夜、彼は家に帰って寝台に横になりましたが、身体が内部からの力に動かされて自動的に起き上がり、イスラムの形式に従った祈りをさせられました。

これがスブドのラティハンの最初の訪れでした。彼はその後一夜の間、その力の訪れを受け、さまざまな体験をさせられました。そのため夜はほとんど眠ることができませんでしたが、日中は変りなく仕事をするのができたと言います。

しかし彼は、それが人間にとって必要なものであることを知りながらも、自分だけが人とは違った体験を受けることを喜ばず、三年たつてこの体験が終わったとき、普通の人々と変りのない生活に戻りました。

決定的な体験

三二歳の誕生日の前夜、彼にとって一六歳の時に受けた指示の意味を明らかにする決定的な体験が訪れました。

彼の身体は七時間にわたって仮死状態になり、彼の魂は地球を離れ、太陽系を超えてあらゆる霊的世界を一巡しました。このいわゆる「昇天」の体験を通じて、彼が二四歳から三年

の間に受けたのと同じ「神の力との接触」を人々に伝達することが、彼の使命であることが啓示されました。この神の力との接触が伝達可能であるという点が、スブドのラティハンの特色であり、これまでに例を見ないところです。

この出来事の後、彼はそれまでの仕事を止め、求める人々にラティハンを伝え始めました。彼は求める人は誰も拒みませんでした、求められなければ決して与えず、招かれなければどこにも行きませんでした。

最初に彼の許にきたのは、少年の頃の導師の弟子たちでした。彼らは導師からムハマツド・スブーの許に行つて教えを受けるようにと言われて来たのでした。導師はバパの決定的な体験の際、遙か遠隔の地から、彼に神の啓示が下つたことを幻視したのです。また導師自身もラティハンの接触を受けるために旅立ちましたが、老齢のため旅の途中で没しました。こうしてこの弟子たちがスブドの最初の会員となりました。

当時インドネシアはオランダの支配下にあつて、彼らの活動は多かれ少なかれ制限されていました。しかしすでにバパは、将来世界大戦が起こり、それを機にインドネシアは独立し、その後に彼はスブドを人々に伝えるため広く世界を回るようになるだろうという啓示を受けていました。

バパはその後、古都ジョグジャカルタに移り、更にインドネシア独立後は、首都ジャカル

タに移りました。

スブドの伝搬

一九四七年、インドネシアの数力所にできていたグループが集まって第一回の大会が開かれ、正式に「スブド靈的同胞会」が発足しました。

インドネシア国外への伝搬は、外国人として初めてラティハンを受けた英国の青年が、日本、香港、キプロスを経て英国に戻ったことがきっかけとなりました。こうして一九五七年に、その後の数多い海外旅行のさきがけとなったババの第一回目の世界旅行が実現しました。その事情とその後のスブドの発展については、また後で触れることにします。ババは全世界のスブドのスピリチュアル・ガイド（靈的な道案内人）です。しかし、ババは自分について何の権威も主張しませんでした。ババは単にムハマッド・スブーであるというのが人々の質問に対する答えです。ババの人は、豊かなユーモアのセンスと優しさに満ちていました。しかし内在する高貴な威厳は隠しようがありませんでした。

③スシラ・ブディ・ダルマ

スブドという言葉は、スシラ・ブディ・ダルマ (Susila Budhi Dharma) という三つのサンスクリット語を縮めたものです。ババのスブーという名前と発音が似ていますが、関係はありません。この言葉はスブド会員の理想を表すシンボル（象徴）として使われています。スシラとは、全能なる神のご意志に一致した真に人間的な生き方ということです。

ブディとは、人間を含めて神の創られた万物の中に、神からの「聖なる力」が宿っており、それに気づくようになったとき、人間は内からも外からも導かれるということです。

ダルマとは、創造主である神の偉大さに完全に全託し、神のご意志に従うということです。従ってスシラ・ブディ・ダルマとは、全能なる神に自分の全てを委ねることによって、人間の内にも外にも働く神の力の助けを得て、神のご意志に沿った生き方をするという意味です。

これは古代の聖典などに書かれている「真の人間」のあるべき姿と違ったものではなく、またスブドのラティハンのなかで受けるものとも一致しています。その意味でスブドの象徴

でもあります。

スブドのシンボルマーク

バパは、宇宙は七段階の生命力から成り、ロホ・イロフィ（大生命力）と呼ばれる神の力が全階層の内部を貫いており、ロホ・クドウス（天使達の霊）と呼ばれるもう一つの神の力が全体を外側から包んでいると説明しました。

それを七つの同心円と七本の線で表わしたものがスブドのシンボルです。同心円は内側から外側に向かって、

物質的生命力（物質力）の領域

植物的生命力（植物力）の領域、

動物的生命力（動物力）の領域、

通常の人間的生命力（人間力）の領域、

完全人の生命力の領域、

それより高い生命力の領域、

それよりさらに高い生命力の領域

を表し、放射状の七つの線はロホ・イロフィを、それらを包む空間はロホ・クドウスを表し

ています。

私たちが住んでいる地球世界は、最も内側の輪で示されている最下層の物質力の領域です。しかし私たちにとって真の自分自身である人間的魂の故郷は、そこから五階層上の「完全人の生命力の領域」にあります。そこが最終的にめざすべき目標地点であり、私たちはみなその旅の途中にあります。

（スブドという語句とシンボルマークは登録商標です。）



スブドのシンボルマーク

④神の力との接触

ババは、スブドのラティハンを人々に伝えるにあたって、幾つかの重要な点を明らかにしました。

第一に、ラティハンは人間の知性や感情や意志の働きとは関係がなく、ただ神に誠実に全托したときだけに体験できるものであるということ。

また、ラティハンが人類が初めて体験するものではなく、実は人間が創られたときからあったこと。ただ、それが全くの新しい体験として感じられるのは、人類がこの体験を失ってから年久しいためであること。

しかし、この力との接触がスブドのラティハンのように、非常に単純で容易な仕方です。受けられるのはこれが初めてであり、従って実は計りしれないほどの神の恩寵であり、人類に対する神の賜物であることです。

ババはさらに、神の力との接触はいつたどのような状態になれば受けられるのか、なぜこれまで難しかったのかも明らかにしました。

それを一言でいえば、神の力との接触は、人間の知・情・意の働きが止まったとき、つまり思考や感情や欲望の圧力から解放されて、人間としては無力化した自分を感じ、全てを神に委ねようとしたときにだけ与えられるということです。

知・情・意の役割

これには少し説明が必要でしょう。

知・情・意の働きは、言うまでもなく人間とは切っても切れない機能で、人間が万物の霊長であるときれるのは、正に知・情・意の働きが地球上の他の生物よりも勝っているからです。つまり知・情・意は、人間に与えられた大切な機能です。しかし一面、これらの働きは生まれたばかりの赤ちゃんの時にはまだ未発達で、子供から大人に成長する過程で発達してきたものです。その働きは、人間が死ぬとまた止まってしまいます。つまり、知・情・意はこの世での生活のための機能です。しかし、人間が生まれる前から死んだ後までつづく霊的生命（魂）や霊的世界（死後の領域）のために役立つ機能ではありません。ましてや神の力との結びつきを可能にする機能ではありません。人間にはそのためには別の機能（内的感覚）が与えられています。私たちは内的感覚を通じて自分の魂とつながり、神ともつながることができるのです。

このために、この世の生活にとつてはなくてはならない知・情・意の働きも、魂の生活と成長にとつては必要でないばかりか、神の力に接触するためにはかえつて邪魔になるのです。言い換えれば、人間の内的感覚が知・情・意とその欲望によつて覆い隠されているかぎり、私たちを内からも外からも包んでいる神の力と直接的な接触を持つことはできないのです。過去において、神の力との接触を受けることが難しかった理由はここにありますが。

心を静める難しさ

昔の人々はこのことに気づいていなかったわけではありません。気づいていたからこそ、知・情・意とその欲望を静めようとして、さまざまな工夫をこらしたのです。山中や僧院にこもつたり、瞑想にふけたのも、断食をしたり、肉食を避けたりしたのも、全て知・情・意とそこからくる欲望を弱め、邪心のない静寂な心を作り出そうとしたからです。しかし、これは決して容易なことではありませんでした。

なぜそれが難しいかと言えば、知・情・意は身体にそなわつた脳機能とかかわつていて、いわば私たち自身の一部であり、私たちが勝手に取り去ることはできないからです。はつきり言えば、私たちが知・情・意の働きを完全に取り去ることができるのは、死ぬとき以外にはないのです。

こうしたわけで、知・情・意を静め、その欲望から自由になろうとする努力には、一つの矛盾が隠されています。それは生きていながら死のうとするようなもので、一種の堂々めぐりなのです。つまり、知・情・意とその欲望を静めようと努力することが、もともと知・情・意の働きから出ているのですから、努力をすればするほど、かえって知・情・意を強めるという逆の結果になってしまうのです。

神の力の助け

したがって瞑想や精神集中も、ある知・情・意で他の知・情・意を押さえつける結果になり勝ちです。それによつて、たとえば意志の強い、物に動じない人間になるかもしれないかもしれませんが、神の力と接触することからはほど遠く、めざましい超常現象が得られても、意志と思考の力で引き起こされたものか、欲望の投影によつて生まれた蜃気楼にすぎないことがほとんどです。

聖者と呼ばれたような人は、この矛盾に早くから気づいていました。彼らも瞑想や瞑想から出発したのですが、ある地点から先は、神の力の助けがなければ行けないことを認めています。そして幸運にも高い力からの助力が与えられたならば、その先は何も考えずにその力に身を委ねるべきだといっています。神の力が実際に働くときには、人間は画家の前に置か

れた白いキャンバスのように、ただ空っぽであるべきで、またその時には自然にそうなれるものだと言っています。

しかし、そこに到達するまでには長い準備の期間、つまり信仰に基づいて禁欲と瞑想の生活が必要だとされていることは変わりません。

スブドのラティハンは、このような準備を飛び越えて神の力との接触を可能にするところから始まります。なぜ、そういうことができるのか、なぜそのような道が今開けたのかには、スブドは答えられません。ババはただ、それが神のご意志であり、スブドが今この時代に出現したのは、恐らく人間がこれ以上神から遠ざからないために、人類に対して与えられた神の愛と恩寵であろうと言っています。

⑤ スブドと宗教

スブドが神の力との接触を取り戻すことであり、ラティハンは実際に神の力を受けて体験することだというと、スブドは宗教なのかという疑問を持つ人がいます。ある意味で当然の疑問です。

しかしスブドは宗教ではありません。

このことを理解するには、まず宗教とはどういうものかを知る必要があるでしょう。

宗教とは何かについては、難しい議論があるかもしれませんが。しかし、宗教の「教」という字が示しているように、宗教の根本は要するに教えです。

神についての教え、悟りについての教え、人間の踏むべき道についての教えというように内容は色々でも、教えがなくては宗教とは言えません。そして初めてそれを教えた人が教祖です。教祖は教えを神から啓示されたのかもしれませんが、修行で自分が悟ったことをまとめたのかもしれませんが。しかし、いずれにせよ、宗教とは教祖である「人」とその教えを信じて、それに従って行く道です。その教祖が神の使徒と呼ばれる人であっても、あるいは預

言者とか覚者と言われる人であっても、事情は全て同じです。そして各宗教の信者は、全員が同じ教えを守り、それに従っていくように求められます。

スブドと宗教は矛盾しない

スブドのラティハンは教えではありません。各人が神に全託して、神から与えられるものを受け取って、それに従っていくものです。そこには教えがなく、従って当然のことながら教義も理論もなく、神以外の人間の指導者（教祖やその後継者）もいないのです。

しかしスブドは宗教と関係がないわけではありません。スブドは多くの宗教を持った人々で成り立っています。スブドの会員の中には仏教徒もキリスト教徒もイスラム教徒もユダヤ教徒もいます。カトリックもプロテスタントもいます。従って、スブドは宗教ではないが、宗教を持った人々（及び宗教的な関心を持った人々）の集まりであると言えます。スブドは宗教ではないが、個々のスブド会員は宗教を持つか、宗教的関心を持っているというのが一番事実に近い答えです。

もし、ある人が仏教徒であり、同時にキリスト教徒だと言えばおかしいことになるでしょうが、仏教徒であってスブド会員であるとか、キリスト教徒でスブド会員であることは少しもおかしくありません。なぜなら、スブドのラティハンで経験するものは、その人の宗教と

少しも矛盾しないからです。

神の導きの特徴

人間はいかに偉い人でも、他人の全てを知るとは困難です。しかし、人間を創られた神は、人間ひとり一人の全てをご存じです。ですから神が人間を導かれるときには、その人の隠れた性質や特徴に合わせて指導することができます。全員が一つの教えに自分を合わせていく宗教と、神の力で直接に導かれるスブドのラティハンの違いがそこにあります。

神はまた、その人の中に本来ないものを基準にして導かれることはありません。その人中にすでにあるもの、本来備わっているものを通して導かれるのです。そのため、ある人がキリスト教徒ならば、神はその人をキリスト教徒として指導されるでしょうし、仏教徒ならば仏教徒として指導されるでしょう。ですからキリスト教徒は、ラティハンによってキリストの真の教えを理解させられるでしょうし、仏教徒は仏陀の真の教えを理解できるようになるでしょう。

ババは、キリスト教徒はラティハンを通してキリストに会うことができるでしょうし、仏教徒は仏陀に会うことができるだろうといっています。

なぜそうなのかといえば、人間にとって神は一つであり、各宗教は本来一つの神から来て

いる
から
です。

イスラム教、ユダヤ教、キリスト教が混在するエルサレム



⑥ スブドと人類の調和

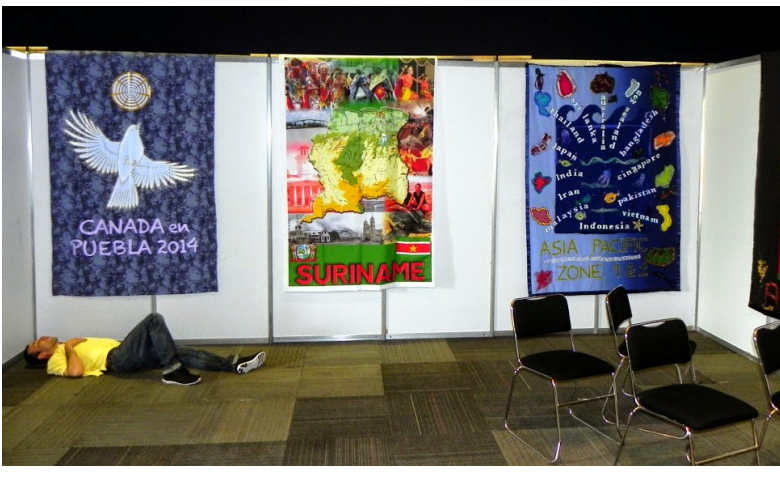
同じことが人種とか民族についてもいうことができます。スブドはまだ会員数は多くありませんが、数十カ国に広がっており、スブドの中にはありとあらゆる人種、民族、国籍の人がいます。というより、スブドはそういう人達で成り立っているのです。しかし、スブドはいわゆる国際人の集まりではありません。またババはインドネシア人ですが、だからといって会員がインドネシア人風になるわけではありません。ラティハンで受ける神の力の働きは、むしろそれとは逆なのです。

日本人はより日本人らしく、英国人はより英国人らしく、インド人はインド人らしくなっていくのです。これがスブドで人々が実際に体験しつつあることです。なぜなら、神はその人の本来の性質にに応じて導いてくださるからです。ですから私たちはラティハンを通して、本来の自分にめぐり合い、自分自身になっていくことができます。

人が本来の自分自身になるとき、その人に神から与えられていた真の個性や才能も明らかになってきます。そうなったとき、人間と人間は真に調和し協力し合うことができるようになります。

なります。

スブド社会のなかでいま現れつつある調和は、こうした意味で、これまでになかったようなものです。人類はみな一つの神によって創られた魂の兄弟であるという、これまで一度も現実化したことのない真理が、スブドのなかで初めて実現しつつあるように見えるからです。



メキシコ、プエブラ世界大会での展示

⑦言葉を越えた体験

ラティハンとは何か、何を体験できるのかということは、一般に興味のある問題だと思います。

しかしこの問いに答えるのは容易ではありません。

ですからその前に、まずラティハンはどういうにして伝えられるかを説明しておきます。スブドに入会してラティハンを受けるためには、二、三の決まりがあります。

年齢が満一七歳以上であること、自分から望んで入会を希望すること、入会を申し込んでから三ヶ月間待つこと、結婚している女性は大の承諾を受けることです。この他には入会資格に制限はなく、もちろん人種、宗教、国籍による差別はありません。一七歳という年齢制限は、両親や勉強に対する配慮と、自分の意志で行動できる成人と見なされるのは、多くの国で一七歳以上であることを考慮したものです。既婚の女性に対する条件は、同じく夫に対する配慮からです。

三ヶ月の待機期間を置いているのは、入会してラティハンを受けたいという希望が、単な

る好奇心や一時的なものではなく、誠実な願いであることを確かめるためです。その期間に入会申込者は、何度かヘルパー（後述）に会ってスブドの原則と目的や、会のあり方の説明を聞き、充分に納得した上で入会しなければなりません。

ヘルパーの役割

ヘルパーというのは、ババに代って神の力との接触の仲立ちとなり、その後も会員のラティハンに関する相談相手になるために会員から選ばれた人々です。

ヘルパーは入会申込者に特別な事情を認めた場合には、入会の時期を遅らせたり、断ることもできます。それはラティハンが一回限りのものではなく、入会後は長く継続して行うものであり、ヘルパーは責任をもつてその人たちの面倒を見なければならぬからです。

神の力の接触を伝える最初のラティハン、オープニング（Opening）または単にオープンと呼ばれるおり、ヘルパーが立会って行われます。

オープンによって入会申込者は正式に会員となり、その後は会の一切の行事に参加することが出来ます。会員は男女別に、原則として週二回、グループでラティハンを行っていきま

ラティハンを受ける態度

すでに言いましたように、ラティハンの基礎は神への全託です。したがって、ラティハンを受ける際に必要となる態度は、自分から積極的には何も考えず、何も望まず、何も期待せず、何も予想せず、ただ真摯な気持ちで自分の全てを神に明け渡し、そのとき神から与えられるものにただ従おうとする態度です。

新たにオープンを受ける人に対する言葉として、バパは次のように述べています。

神を礼拝する際には、意志を働かせたり、考えをめぐらせたりすることなく、神を信じ、信頼し、誠実にすべてを委ねて神に従うのが正しい態度であり、それを少しも疑う必要はありません。

なぜなら、そのような状態においては、私たちは欲望の圧迫から解放され、人間以下での力の影響を受けないからです。実際、もしあなたがなおも自分で意志や思考を働かせるならば、欲望やさまざまな低い力の影響を受けるでしょう。なぜなら、これらの意志や思考は、実のところ通路であり、そこを通って欲望やあらゆる低い力が人間の内部の感覚に出入りするからです。

なお、礼拝のラティハンを受けたとき、あなたは何かを経験するでしょうが、それ

は実は浄化の過程です。あなたの身体はこれまで、意志や思考の働きによって起こされた欲望や低い力で満たされていましたが、その身体のあらゆる部分が、少しずつ浄められていくという意味です。

パパは、あなたは何かを経験するだろうという言い方をしていますが、スブドのラティハンで何を受けるか、何を体験するかは、実際に前もっては誰も予測することができません。神はひとり一人の性質に合わせて導かれるといいましたが、人間はみな違っています。ですから神の導きもひとり一人違います。これがラティハンで経験することを前もって予測することができない理由です。スブドでは、他人の経験は必ずしも先例にならないのです。

しかし、各人の受けとり方、感じ方は違ってても、オープンされることによってその人の内部で何かが始まります。それがラティハンです。

ラティハンで何が起こるのか

言葉による説明は難しいのですが、スブドのラティハンは、その人の内部で、「真の自分自身」である人間的魂が目覚め、神の力と接触して、神の力の流入を受け入れる行為です。オープンとは、自分の魂を通じて神の力が流入する通路が開かれることを意味します。

その力は、もし内的感覚が鋭敏であれば、一種のバイブレーションとして感じられます。しかし感じると感じないにかかわらず、その力は私たちの意志や思考の活動を抑えるように作用します。感情も静まっていきます。そして私たちは「欲望の圧迫から解放され、人間以下の力の影響を受けない」状態におかれます。

オープンを受ける人は、そのとき、それまで知らなかった力によって、身体の動きが促されるのを感じます。そして手でも、脚でも、首でも、腰でも、それが内部から動かされるのを感じたら、その促しに逆らわずに従っていきます。

この状態は、今述べたように、意志や思考の働きが封じられ、感覚から切り離されることによって起こります。そして「真の自分自身」である人間的魂が目覚めることによって、意識ははっきりしています。

これがオープン、並びにラティハンの際に起こることです。身体はこの動きは、神の力と接触し、その通路が開かれたことによって、神の力が身体へ流入し始めたことを意味します。そしてそれによって生じる身体の動きの促しに逆らわずに従うということは、神のご意志に服して従っていくことを意味します。ラティハンが神への礼拝であるとされるのはそのためです。

またそれは、目覚めた人間的魂がこの世の物理的身体と接触し、それが自分の一部であり、

地上における自己表現の道具でもあると認識していく過程でもあります。

それを身体の側からみれば、これまでつばら知・情・意の命令に従って動いていた身体が、その上位にある魂の指図のもとで、神の力によつて動く動きを経験し始めるということです。

この身体の動きは、ラティハンを続けることによつて、徐々に変化し発展します。さまざまな仕草をしたり、踊りの形をとつたり、祈りを表現したりします。声や言葉や歌をともしうことも少なくありません。

これが多くの人がスブドのラティハンで経験することです。

⑧ 浄化といふこと

このような身体の動きによつてもたらされるのは、浄化です。まず四肢が、そしてその他の器官が、流入する神の力によつて、少しずつ洗い浄められていきます。それは身体の浄化からはじまつて、より内面的な機能である感情や思考や意志の浄化へと進みます。そしてついには理解や意識の浄化におよびます。またそれによつて私たちの人間的魂は成長し、強く大きくなつていきます。

私たちの身体や心のなかに積み重なつている不純物や汚れは、私たちが自分の思いや行動によつて作りだしたものだけではなく、両親や、さらに祖先たちから引き継いだ欠点や過ちから成り立っていて、膨大な量に達しています。

ラティハンによる浄化は、その汚れの全てを少しずつ洗い流して、私たちを根底から作りがえる働きをもっており、二年や三年で終わりになるような簡単な作業ではありません。最終的には、神が意図されたような完全な人間となつて、人間的魂の本源の故郷である天国に還ることがラティハンの目的だからです。そのためラティハンによる浄化は、多分一生をか

けても終わりにはならない長い旅路であり、スブドの会員はその道を忍耐強く歩み続けることになります。

その過程のあちこちで、会員たちはさまざまなことを学び、さまざまなことを経験していきます。しかし目標は同じでも、そこに至る経路と、その途中で体験することはそれぞれ異なっており、それを一般化することは困難です。めざましい経験をする人もいますが、とりたてた経験はないという人もいます。

聖者の場合

すでに述べたように、この過程は、その人の条件、内容、強さに応じています。

初めにふれた古代の預言者や聖者の場合、彼らも神の力との接触を受けましたが、そのとき彼らはもう心も体もある程度きれいになっていました。もともと優れた素質（魂）を持っていた上に、神へのゆるぎない信仰と愛を持っていました。彼らは神に喜ばれると思われることは何でもするように誠実につとめた人たちでした。

しかしスブドのラティハンを受ける現代の私たちは、事情が大きく異なっています。

私たちは、預言者や聖者が神の力との接触を与えられたときにすでに持っていたようなものをまだ何一つ持っていません。私たちは、何の準備もなしに、つまり汚れたままで、望ん

でも望み得ないとされた神の力との接触を与えられるのです。

つまり与えられる神の力は同じでも、受ける側の条件は違っているということです。

浄化の条件

ここから、私たちは、彼らが神の力と接触する前にすでに持っていた心の特性を、スブドのラティハンの実践を通じて身につけなければならぬことになります。

この過程は、一般に何年にもわたって続きます。また浄化の過程で体験する事柄は、必ずしも楽なことばかりではありません。神の力による浄化は、私たちがそれに同意すれば、私たちが自分では気づかないものまで何一つ見落とさないからです。

私たちが同意すればといったのは、神は人間に自由を与えて下さっており、望まないことを強制されることはないからです。

ですから、私たちがもし浄化されることを望まないならば、神は恐らくそうされないでしょう。しかしそうならば、ラティハンを受ける意味もないわけで、スブドに入る必要もないでしょう。

これとは逆に、浄化の過程をなめらかにしようとするれば、それにふさわしい態度があります。ババはそのために四つの条件をあげています。それは忍耐と誠実と、神への信頼と全託

です。これは土地に喩えれば草木の成長をうながす肥料のようなものだと言わす。ババは述べていま



来日した際のババ・ムハammad・スプー

⑨ スブドの果実

ですから「スブドのラティハンとはどんなものか、それで何を経験し、何が得られるのか」と言われても「体験しなければわかりません」としか答えられません。不親切なようでも、それが一番正直で嘘のない答えです。それは初めて見る果物のようです。食べなければ味は分かりませんが、食べればもう説明もいらなくなります。

スブドが、宣伝はもちろん入会の勧誘もしないのは、このことと関係があります。本当に良いものならば、なぜ本や講演会を通じて積極的に宣伝しないのかと聞かれることがあります。

しかしスブドには理論も教義もないので、スブドを説明しようとすれば、結局ラティハンを説明するほかありません。ところがそれを言葉にすることがとても難しいのです。スブドの会員は、みなスブドを言葉で説明することの難しさを感じています。友人から聞かれても、うまく説明できないのです。それはスブドが難しいからではありません。むしろ単純でやさしすぎるからです。しかし決して言葉にはなじまないのです。

さらに別の観点から言えば、ある人のラティハン経験はその人だけのものです。神の力による浄化と訓練という本来の性質から、ある人の体験は、その人だけに意味があります。スブドでは他人の体験は先例にならないと言いましたが、多くの場合あまり参考にもなりません。だから人に話す必要もないし、人から聞く必要もないわけです。

果実の性質

しかし神の力による浄化と訓練は必ず結果を生み出します。果実を見て樹の善し悪しを知れという格言は、そのままスブドに当てはまります。スブドは結果によつて判断されることを望んでいます。その結果とは、ラティハンを通して得られる性格の変化であり、習慣の変化であり、感受性の変化であり、生き方の変化であり、人間性そのものの変化です。

この変化のひとつ一つをここで取り上げることは到底できません。仮にそれらを羅列しても、薬の効能書きのようで、あまり意味のないことになるでしょう。

ラティハンによつて導かれる最終的な理想、つまりスシラ・ブディ・ダルマで表される真の人間らしきとは、大変に広く大きいもので、そこに到達するためには非常に大きな変化を経験しなければなりません。その中には普通の表現では表し切れないものがたくさんあります。

しかしもつと身近で些細な変化、例えば怒りつぼくなくなつたとか、物事に振り回されない平静さとか、酒を飲まなくなつたとかいうようなことでも、当人にとっては少なからぬ恩恵となり、まわりの人々にとつても益になります。

このような変化は、一時的な体験の場合と違って、その時だけのものではなく、永続的なものであり、人間自体の変化だからです。体験は、たとえばどんなに素晴らしくても時間の経過と共に消えていきます。しかし人間性に起こる変化は、時と共に消えることなくその人のものです。

⑩ スブドと実生活

ラティハンは原則として、週二回、一回三〇分で足りります。次第に回数を増やしていくこともありません。また何か別の修練を付け加えることも一切ありません。ラティハンをする以外は、生活の仕方は一般の人と全く同じです。結婚も家庭生活も、仕事やその他の社会生活も、全てが普通で当り前です。

週二回を多いと感じる人もあるでしょうし、少ないと思う人もあるでしょう。しかしこれも、修行が進むにつれて修練内容を強化するというこれまでのやり方と比べると、今までになかったようなことです。

スブドは聖職者や僧侶の道、つまり精神生活の専門家になる道ではありません。スブドには専門家はいないのです。しかし単なる世俗の道でもありません。すでに述べたように、これまでの世俗の道は、多かれ少なかれ僧の道の垂流にすぎませんでした。僧になるために出家して厳しい修行の道に専念することができない人々のために、僧侶が行う修行を、世俗一般の生活に合うように手直ししたものだからです。

週二回で良いということは、スブドのラティハンで働く神の力の作用がそれだけ強く、永続性があることを示しています。スブドは、これまでに人類の文化的遺産として伝えられてきたものの中にはなかったようなものです。

強いて似たものを探せば、キリストの弟子たちの聖霊降臨の体験（キリストの死後、集まった弟子たちに聖霊が注がれ、その力に満たされて異言を語り、預言をし、数々の奇蹟を行ったという聖書の記録）を挙げることができるかもしれませんが。しかし今はその実体が失われてから年久しく、確かめようがありません。

実生活の変化

神を求め、神に近づこうとするこれまでの企ては、多かれ少なかれ私たち人間の意志と努力に基づくものでした。すなわち人間から神へ向かう試みでした。しかしスブドでは、その方向が逆になっています。それがスブドの啓示です。すなわち、神の方から人間に近づいてきて、私たちを引っ張り上げようとされているのです。

ここから全てについて微妙な違いが生まれます。スブドでは日常一般の生活は他の人たちと変わりませんが、そうでありながら、やはりどこか違ってくるのです。生き方やすることは同じでも、その中味が少しずつ変わってくるのです。ラティハンで私たちが受けとる神の力

の量はまだ微々たるものでも、神の力の働きをすでに内部に持っている人の生き方には、自然にそれが質の変化として現れてきます。

けれども非常に微妙でゆるやかな変化であるために、スブド会員にとってもそれに気づくのに時間がかかります。しかし、それに注意を向け、それを意識することはとても大切です。それによつて私たちは、ラティハンによつて与えられる変化の方向を知り、日常生活の処し方のなかで、その方向に向かつて協力することが可能になるからです。

たとえば私たちは、ラティハンによつて心が静まるのを経験します。安らかで静かな心の状態は、神の力と接触するための条件でもあり結果でもあるのですが、日常の私たちの心は、それとはかけ離れています。ラティハンを続けることで、私たちの心は、次第におだやかに落ちついたものに変えられていきますが、それが明確になるまでには、時間がかかります。また日常生活での混乱した心の状態は、その過程を遅らせます。しかし私たちは、自分の心の動き方、働き方に注意を払い、それに気づいていることによつて、心の動きをある程度までコントロールすることができます。そして実際、スブド会員はそのための助けが与えられています。私たちがラティハンを行うのは週二回に過ぎませんが、忙しい日常生活のなかでも神の存在を思い出し、ほんの数秒でも自分の内面をラティハンの状態に近づけることで、静かな心を取りもどすことが容易になります。こうしてスブド会員は、神の力の助けを得て、

次第に思考や感情によって振りまわされなくなっていくます。

ただそれを大きな恩恵であると感じても、言葉でそれを表現するのは困難です。というより、それを表現するためには、言葉で語るよりも、社会に役立つような良い行為によって表現する方が、スブド会員にとってよりふさわしいやり方だということです。

スブド会員は社会で何をするのか。これは会員自身にとつても非常に興味のある問題です。それを眼に見える行動として社会に示すことができたとき、スブドは単に個人の幸福や霊的向上のためだけではなく、人類全体に対する恩恵として神から与えられたものであることが理解されるようになるでしょう。

⑪ スブドの発展

スブドに興味を抱いた英国のあるグループの招待で、パパが初めてインドネシアの国外に出たのは一九五七年で、パパが五六歳のときです。将来世界をくまなく回るだろうという啓示を受けてから、実に二〇年以上の年月が流れていました。

パパはそれまで何ら外部への働きかけを行わず、スブドの発展をただ神に委ねていました。スブドは神の直接の働きであり、神のご意志によつて与えられたものである以上、いつ、どのようにしてスブドが世界に広まっていくかは、神がお決めることだからです。しかし二十数年の間、その態度を変えなかったことは、パパの神への信頼と全託が、いか



イギリスを訪問した時のパパとジョン・ベネット

に深く完全であつたかを示しています。

けれども、それにつづくスブドの発展は、前例がないほど目覚ましいものでした。英国だけのはずだったババの海外旅行は、予期しない出来事が重なって、ヨーロッパ、アメリカ、オーストラリアにまたがる一年以上の大旅行になりました。その翌年の一九五九年には、早くも四〇ヶ国以上からの会員が集まって、第一回のスブド世界大会がロンドンで開かれました。二回目の世界大会は、四年後の一九六三年にニューヨークで開かれましたが、その時までは、アジア、北米、南米、ヨーロッパ、アフリカ、オーストラリアと、地球上の全ての大陸の多くの国々にスブドは広がっていました。

スブドの揺籃期

スブドを伝えるには、必ず人と人とが直接会ってラティハンを共にすることが必要であることを考えると、正に驚くべきことです。その頃までをスブドの揺籃期と呼ぶことができません。ババはそれまでにすでに三回の世界旅行を終えていました。特に一九五九年から一九六〇年にかけての旅行は文字通り世界を一巡し、旅行期間は四二四日に達しています。また、ニューヨークでの第二回世界大会は、スブドが国際的な団体として組織上の形を整えた点でも重要です。

それにつづく何年かの間は、各国のスブド会員にとって、自分たちのグループを整え、ラティハンの働きを理解するための成長期だったといえます。日本のスブドにとっては画期的な、東京での第三回世界大会は一九六七年に開かれています。

その後の展開

スブドにこれまでになかった新しい霊的向上の可能性を見つけてオープンを受けた初期の会員にとつて、ラティハンの真の性質を知ることが必ずしも容易ではありませんでした。スブドはあらゆる点で、これまでの常識とは違っていたからです。

ラティハンに、たとえば瞑想などの人間的な補助的な手段を付け加えることは、進歩を早めるどころか妨げになります。また熱心のあまり、ラティハンの回数を増やしてみても、決して進歩を早めることはできません。

過去の常識に慣れ親しんできた人々にとつては、単にこれだけのことで、それが本当であると真に納得するには時間が必要でした。そんな常識外のことにはあるはずがないと思っただけです。努力は必ず実を結ぶというのはこの世の鉄則です。ラティハンは素晴らしいと思えば、その進歩をもっと早める方法はないかと考えるのもまた人情です。「神の力」が単なる言葉に成り下がってしまった現代人にとつて、「神の力を受けるときには何もする必要が



インドネシア ジャカルタのラティハンホール

なく、しない方がいい」ということが、その単純さのためにかえって難しくなっているのです。

ババの繰り返しのお言にも関わらず、多くの人がこのことや、その他のことに戸惑い、疑い、ババのお言を無視しました。また努力が要らないといわれると、この世の生活はなげやりでもよいと誤解する人もいました。

要するに人間は、自分で体験して納得するまでは、何事も本当に理解しないものです。ですから、スブドの原則と目的を真に納得して受け入れるまでに、ある程度時間がかかったとしても止むを得ないことです。

一九七一年にジャカルタで開かれた第四回世界大会は、スブド全体にとって記念すべき大会となりました。数十カ国から一三〇〇人の会員が参加し、スハルト大統領が開会式に出席して祝辞を述べました。その時までにスブドは、人種、民族、宗教の違いを超えて真の調和を保っている国際的団体として、インドネシア政府から認められていたのです。スブドがスブド外の人々の注目をひいたのはこれ

が最初でした。そして各国のスブド会員が、スブドが果たし得る社会への貢献について、真剣に眼を向け始めたのもこの頃からです。

スブドはその後、アフリカの幾つかの国や、冷戦終結後はロシアやウクライナを初めとして旧共産圏の各国にも広がりましたが、その詳細は省略します。

⑫ スブドと社会活動

スブドが人類に対する神の恩恵の一つであるとすれば、スブド会員は一般社会に対してある責任を負っているはずです。

スブド会員が将来特に重要な貢献ができるのではないかと考えられている分野には次の三つがあります。教育と文化（芸術）と社会福祉です。

スブド会員による学校教育は、知能偏重の画一的な教育に対して新しい息吹を吹きこむことができますと考えられています。スブド会員である教師は、ひとり一人の内部に隠れている真の性質と能力を感じとり、それに沿って子どもを導くことができます。現在、英国とインドネシア、そして南米のエクアドルとコロンビアにスブド会員が設立した学校があります。

世界中の会員のなかには、芸術家が少なくありませんが、彼らはラティハンによって、自分の感受性や表現が大きく変わっていくのを経験しています。そしてこれまでの芸術が、いわば真の生命を欠いた死んだ芸術であると感じています。スブドの芸術家がめざす作品は、

人間の感情や思考や美的感性を表現するだけではなく、より深い内的感覚から湧き出る魂の響きを伝えるものになることでしよう。

スブド会員の文化・芸術活動をサポートする団体としては、SICA（スブド・インターナショナル・カルチュラル・アソシエーション）という関連組織があり、英文のホームページでその活動を知ることができます。

国連NGO

社会福祉事業、すなわちスブドによる孤児院、老人ホーム、病院、精神障害児の施設などの建設は、スブドの大きな目標です。もし実現すれば、物質的な外側の福祉と、精神的な内側の福祉を兼ね備えたものになるでしょう。

スブド会員による福祉活動は、すでに多くの国で行われており、それらをサポートするために、SDIA（スシラダルマ・インターナショナル・アソシエーション）という会員組織が

Q Fund, All Rights Reserved by Chellie Kew



スブドの関連団体として設立されています。SDIAの活動は国連からも高く評価されており、経済社会理事会のアドバイザーである国連NGOの資格を与えられています。

スブド会員の社会的活動をサポートする会員組織としては、上記のほか、企業活動（エンタープライズ）をサポートするためのSEIS（スブド・エンタープライズ・インターナショナル・サービス）があります。また健康・医療分野の組織として、SHA（スブド・インターナショナル・ヘルス・アソシエーション）があります。

スブド会員と企業活動

スブドが社会活動を活発に押し進めるためには、資金の裏付けが必要です。すでに世界の七〇以上の国や地域に広まっているとはいえ、会員数としてはまだ決して多くはないスブドが、会員からの献金だけで資金をまかなうことはできません。（スブドには定額の会費はなく自由献金です。）

パパが示唆したのは、会員たちが協力して企業活動を行い、その利益の一部でスブドと社会活動の財政を支えることです。この取り組みは、一九七一年以来、さまざまな形で規模で試みられてきましたが、現在までのところ、必ずしも成功したとはいえません。

しかしスブドの特徴の一つは、ラティハンの実践と世俗生活が矛盾なく両立するところに

あります。スブドの会員は、ラティハンの進歩を損なうことなく、事業やビジネスを追求することが出来ます。また企業活動は会員にとつて、ラティハンで受けた変化と恩恵を、現実の生活の場で確認する機会にもなります。ですから企業に対する会員の取り組みは、今後とも絶えることなく続けられるでしょう。

資本主義のもとでは、企業の唯一の目的は、利潤の追求です。しかしスブド会員の企業活動は、自分の利益の追求だけではなく、その利益によつて社会に貢献することが最初から目的の一つになります。その意味でこの挑戦は、人間としての正しい経済活動をめざす未来的な意義を持っているのではないのでしょうか。

⑬ 会の組織

スブドの組織は、小さなグループから国際機構まで、同一の構成で作られています。一般会員とヘルパーとコミッティからなるシンフルな組織です。

ヘルパーについてはすでにある程度の説明をしました。入会希望者にスブドの説明をし、新会員をオープンし、霊的な面について会員の世話をする人たちです。男性は必ず男性のヘルパーが、女性には必ず女性のヘルパーが世話することになっています。

ヘルパーのなかには、直接会員に接して世話をするグループ・ヘルパーの他に、広い地域にわたる事柄に責任を持つ地域ヘルパーと、一国のスブド全体の事柄にたずさわるナシヨナル・ヘルパーがあり、外国に対してその国のヘルパー組織を代表するクジワアン・カウンシラーがあります。資格的にはみな同じです。ヘルパーは全員が平等で、色々な種類のヘルパーは、仕事の役割が違います。これらのヘルパーの役職は四年毎に改選されますが、ヘルパー自体の資格には任期がありません。

コミッティは会の施設を管理し、記録や出版や財政に責任をもつ人々です。一般の団体で

必要とされる仕事は、スブドでは全てコミッティの仕事です。

コミッティにも支部コミッティや地域コミッティや、ナショナル・コミッティなどの区別があります、全て任期があつて会員から選ばれます。

その国のスブドを対外的に代表するのは、ナショナル・コミッティの長である全国委員長です。またヘルパーの場合と同じように、外国に対してコミッティを代表するコミッティ・カウンシラーがいます。この構成は全世界共通です。

ヘルパーとコミッティは互いに助け合つて働きますが、分担する仕事はきちんと分かれています。その意味では独立して仕事をしています、コミッティは必要に応じてヘルパーの助言を求めることができます。

主な国際機関

スブドの組織の最高の決議機関は四年に一回開かれる世界大会で、一国の組織では全国大会が最高決議機関です。ここで主な国際組織をあげておきます。

WSC…世界大会が最高の決議機関ですが、世界大会と世界大会の間は、各地域のヘルパーとコミッティの代表から成るWSC（ワールド・スブド・カウンシル）が最高決議機関となります。

I S C … スブドの国際事務局（インターナショナル・スブド・コミッテイ）のことで、W S C の執行機関です。設置場所は四年毎に変わり、世界大会で決められます。

S P I … スブドの国際出版局で、バパのトーク（談話）の翻訳と出版を担当しています。その他、前章であげましたが、福祉、文化など、さまざまな社会活動を担当する国際的な関連団体があり、それらはウイング（つばさ、関係機関）と呼ばれています。

⑭日本のスブド

日本にスブドが伝えられたのは、世界のなかで最も早く、一九五四年のことです。靈的真理を求めて世界中を放浪していた若い英国人の言語学者が、たまたまインドに滞在中、ある導師から、インドネシアへ行けば求めているものが手に入るだろうと示唆されました。その言葉に従ってインドネシアに渡った彼は、バパの存在を知ってスブドのオープンを受け、それが自分の求めていたものであることを知りました。約三年後、彼は日本に招待される機会があつて、数ヶ月間日本に滞在しました。彼はその後香港にしばらく滞在し、キプロスを経て英国に戻りましたが、それがバパの第一回の世界旅行につながっていきました。

最初のグループ

日本に滞在中に彼は十数人の人々にスブドのラティハンを伝えました。その初期のグループは、彼が去った後、乏しい体験と断片的な知識と共にとり残されました。本も資料もなく、言葉の問題でインドネシアとの連絡もままならなかったため、グループは間もなく解散に迫

い込まれましたが、香港でオープンを受けたオランダ人を加え、一、二人の人が単独でラティハンを続けました。

一九五七年のババの世界旅行とその後のスブドの発展は、その人たちを勇気づけました。こうして数人のグループが再発足し、翌一九五九年の二月には思いがけなくババの日本訪問が実現しました。

この第一回目のババ来日の際にオープンを受けた人たちは、二〇〇人以上にのぼります。当時は三ヶ月の待機期間もなく、単に好奇心から集まった人たちも多かったのですが、それを機に現在までつづくスブド・ジャパンが結成されました。



川崎市のスブドハウス

現在のスブド・ジャパン

その後一九六七年には、第三回世界大会が東京で開かれて二〇〇人の外国代表を迎え、国際的な交流も次第に活発化しました。

一九七一年のジャカルタでの第四回世界大会には、日本からも約六〇名の会員が参加しました。

パパは一九八七年に死去しましたが、それまでしばしば日本を訪れました。パパはラティハン、テスト、トーク（談話）を通して会員のスブドに関する理解を深めました。会員外の人々に話をすることはありませんでした。パパは亡くなりましたが、残された数多くのトークは、今も会員の貴重な指針になっています。

すでに述べたように、スブドは宣伝や勧誘をいっさい行いません。そのためもあって会員数は多くありませんが、東京をはじめ幾つかの都市にグループがあり、川崎市宮前区鷺沼にスブド・ハウスが建てられています。

スブドジャパンの歩み

1954 年	英国人のフセイン・ロフェの来日により、スブドのラティハンが初めて日本に伝えられ、インドネシア以外では最初のスブド・グループが日本で誕生した。このグループは間もなく解散したが、少数の人は単独でラティハンを続けた。
1958 年	ババ・ムハマッド・スブーの世界旅行と、海外でのスブドの発展を受けて東京でグループが再発足。「20 世紀の奇跡スブド」（理想社）を出版。
1959 年	ババの 1 回目の来日により、200 人以上の人がオープンを受け、現在のスブドジャパンの前身となる全国組織が発足。英国、ロンドンで第 1 回スブド世界大会開催。
1963 年	米国ブライアクリフで第 2 回スブド世界大会開催。ババの 2 回目の来日。
1967 年	日本、東京で第 3 回スブド世界大会開催。世界各国から 400 人以上の会員が参加した。ババの 3 回目の来日。
1969 年	ババの 1 回目の来日により、200 人以上の人がオープンを受け、現在のスブドジャパンの前身となる全国組織が発足。英国、ロンドンで第 1 回スブド世界大会開催。
1972 年	ババの 5 回目の来日。
1975 年	ドイツ、ウォルスブルグで第 5 回スブド世界大会開催。

	日本から代表ほか 10 数名参加。
1976 年	川崎市鷺沼にスブドハウスを建設、ババ臨席のもとで開所式（ババ 6 回目の来日）。
1978 年	ババの 7 回目の来日。
1979 年	ババの 8 回目の来日。カナダ、トロントで第 6 回スブド世界大会開催。日本から代表ほか 10 数名参加。
1980 年	ババの 9 回目の来日。
1982 年	ババの最後（10 回目）の来日。
1983 年	英国、ロンドン郊外のアヌーグラハで第 7 回スブド世界大会、日本から代表ほか 10 数名参加。
1985 年	スブド-内なる生命との出会い」（めるくまー社）を出版。
1987 年	ババ逝去（享年 86 歳）。
1989 年	オーストラリア、シドニーで第 8 回スブド世界大会開催。建部ロザックが ISC（インターナショナル・スブド・コミッティ）の委員長に選出され、1993 年まで ISC 事務局は日本に置かれた。
1993 年	南米コロンビア、アマネッサで第 9 回スブド世界大会開催。日本から代表ほか 10 数名参加。
1997 年	米国、スポーケンで第 10 回スブド世界大会開催。日本から代表ほか 10 数名参加。
1998 年	第 39 回全国大会において、会の名称を現在の「スブド

ジャパン」に変更。「未来からの贈り物」(八重岳書房)を出版。

2001 年 インドネシア、バリ島で第 11 回スブド世界大会開催。
日本から代表ほか 10 数名参加。

2005 年 オーストリア、インスブルックで第 12 回スブド世界大会開催。日本から代表ほか 10 数名参加。

2010 年 スブドに法人格を持たせるために「スブドジャパン」とは別に「一般社団法人スブド JC」を設立登記。ニュージーランド、クライストチャーチで第 13 回スブド世界大会開催。日本から代表ほか 10 数名参加。

お問い合わせ

●ラティハンに参加するには

ラティハンを行うには、スブドに入ってオープンを受けなければなりません。オープンを受けるには 17 歳以上である必要があります。ラティハンを体験したいという意志を表明し、入会の申込をした時点からオープンまで、通常 3 ヶ月の待機期間が設けられています。(詳しくは、⑦言葉を超えた体験を参照)

入会申込後オープンまでに 3 ヶ月の待機期間がある理由は、申込者がラティハンの説明をするヘルパーと親しくなり、スブドの目的や意味についてヘルパーから必要な情報と説明を受けた上で、スブドに入るかどうかを決めるためです。スブドの意義について十分に理解せずにオープンを受けて会員となり、期待外れとならないよう、この期間が設けられています。

●オープンまでの流れ

ラティハンに興味を持たれたら、スブドジャパンの下記連絡先にご連絡ください。なお今はまだ入会申込書を提出する気持ちに至っておらず、とりあえず話だけ聞いてみたいということであれば、その旨をお申し出ください。お近くの支部もしくは

スブドハウスで実施しているラティハンの説明の予定をご案内します。現在、東北、関東、東海、関西、中国、九州でグループ・ラティハンを行っています。

3ヶ月の待機期間の間に、すでにスブドの会員である人々を通して色々と話を聞き、納得のいくまで質問をして十分な理解を得た上で、オープンを受けて入会することになります。

入会後は、原則として可能なかぎり週2回支部のラティハンに参加し、ラティハンを実行することになります。

<連絡先>

〒216-0004 神奈川県 川崎市 宮前区 鷺沼 1-9-22 スブドジャパン

TEL 044-855-4824 FAX 044-855-0290

URL <http://subud.jp> Email info@subud.jp

スブド ハンドブック ～心の時代から魂の時代へ

発行元：スブド・ジャパン

〒216-0004 神奈川県川崎市宮前区鷺沼

1-9-22

本書の無断複製・転載を禁じます。

